

牧師室から (2022.9.11)

入院していた義父が三日前（8日）に家に戻ってきた。あと一週間しか残っていないだろうという医者診断があり、最後を住み慣れた家で迎えるためであった。義父がいつも楽しんで手入れをしていた庭の木や花が見えるところにベッドを置いて迎えた。しかし、昏睡状態にいるかのような義父は、ずっと眠り続けていた。

10日で88歳になる義父の誕生日を祝う気持ちで、真っ赤に花が咲いているハイビスカスの植木を窓際に置いた。満開した花はとても大きく、色も生き生きしている。義父が目覚まして見てほしいという気持ちであった。一昨日のことである。

義父が長い眠りから目を覚ましたように、目を開けてかすかな声で言ったことは、「水が飲みたい」ということであった。とろみをつけた水がある程度飲んだ義父は、花を見ながら「花にも水をあげて」と言った。花が好きである義父らしい言葉である。

西東社という出版社から出ている『花ことば物語』の本の中に紹介されているのを見ると、ハイビスカスの花の命はたった一日であるという。知らなかった。

その話の通りに、昼まで生き生きとしていた花がいつの間にか下に落ちていた。夜中にひそかにその植木を外に出しておいて、夜空が見える庭のベンチでしばらく座っていた。

真夏の太陽を浴びながら、情熱に満ちたような真っ赤な花を咲かせたハイビスカスのように、義父もこの家で60年以上の生活をしながら、ときには激しく、ときには黙々とし、いろいろな人生の喜怒哀楽を味わってきたのであろう。

古いが、義父の手入れが行き届いている家である。この家に対する義父の執着ともいえるほどの気持ちを考えると切なくなるが、天の国に備えている住処はもっと素敵であるだろう、と思いながら、自分自身を慰めてみる。

「私の父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」（ヨハネ 14：2, 3）

（鈴木善姫牧師）